

第3篇

病 機



病機とは、疾病が発展変化する際のメカニズムのことである。そして中医病機学とは、中医病因病機学を構成する一部であり、臟腑経絡・気血津液などの中医基礎理論を根拠とし、病因学・発病学説および中医弁証学と有機的に結びつくことによって、疾病の変化発展の内在メカニズムを研究し、その伝変と転帰の病理的本質を明らかにしようとする学問である。

疾病は多種多様である。病因が異なり、病位が異なり、人体の正気の状態や人体をとりまく環境が異なれば、疾病のメカニズムも複雑に変化する。例えば疾病には外感、内傷の区別がある他に、発生部位も臟腑にあることもあれば、経絡・気血・津液にあることもある。そして、それぞれに異なった病機変化・伝変・転帰の法則がある。それらの法則性の研究によって、中医病機学の体系は重層的になっていったわけだ。そこで本篇では病機を、臟腑病機、経絡病機、気血病機、精病病機、津液病機、体質病機、情志病機、痰飲病機、六氣病機、衛氣營血病機、三焦病機、六經病機の合計12種類の体系に分けて、分析・検討していきたいと思う。

疾病の種類やそのたどる過程には、特定の病機体系の影響が強く表れるものだが、複数の病機が融合しあって疾病に影響を及ぼしている例もある。例えば、臟腑病機は各種の病機体系の基礎となるものであり、内傷雑病の変化発展を左右するだけでなく、外感疾病の病理変化にも影響を与える。内傷雑病はとくに複雑なので、情志病変が強く表れることもあれば、気血・津液病変、あるいは痰飲水湿病変が強く表れることもある。病機の体系はきわめて複雑であり、臟腑病機体系だけではその複雑さをカバーすることができないので、実際には情志病機・気血病機・津液病機・痰飲病機などが臟腑病機が追求しきれない部分を補っているのである。外感疾病の場合も同様に、臟腑の不和が根本にはあるのだが、その病機変化は気血・津液・痰飲にまで及び、さらに邪気が外から侵入するという要素が加わる。したがって、その病理的性質や伝変・転帰にはまた別の法則が加わる。例えば、六氣病機には外邪の特徴が強く表れ、衛氣營血病機と三焦病機、また六經病機には、外感疾病の変遷・転帰の法則の特徴が強く表れることになる。

以上のように、疾病の病機変化には、各種病機体系の特徴がさまざまな側面から表れるが、病機どうしはしっかりと繋がっているのも、これらの病機理論によって個々の疾病を分析し認識しようとするときには、この点を充分留意しなければならない。

(洪 夢滄)

## 第13章 臟腑病機

臟腑病機とは、臟腑の機能と形質に異常な変化が発生するときのメカニズムを指す。中医学が臟腑病變のメカニズムを認識したのは非常に早く、『黄帝内経』が成立する以前の戦国前期にまで遡ることができる。また『列子』周穆王篇のなかにも「その心を去ればすなわち口言うあたわず、その肝を去ればすなわち目視るあたわず、その腎を去ればすなわち足立つあたわず」という記述がすでに見られる。それが『内経』に至るとようやく、臟象学説を基礎として、臟腑病機理論が全面的に展開されるようになった。ことに『素問』至真要大論篇の病機十九条は、臟腑病機のモデルとなるものであり、臟腑弁証の基礎となっている。続く後漢の張仲景は『傷寒雜病論』のなかで、臟腑経絡学説にもとづいて、病証が発生するという事は臟腑の病理変化が顕在化したものであるという説を示し、臟腑病機を根拠として弁証論治するという方法に道を拓いたのである。

隋唐時代になると『諸病源候論』、『千金方』、『外台秘要』などの医学書が病機学説を発展させたが、それらはおおむね臟腑を柱として議論を進めている。『千金方』を例にとると、臟腑ごとにまず総論を設け、それぞれの臟腑の生理・病理と弁証治療をまとめ、次に虚実寒熱による病証を挙げている。部門別に整理された実に内容豊富な著作であり、これを見れば臟腑病機による弁証がこの時代にすでに一般的になっていたことがわかる。

宋元以降の臟腑病機の研究では、脾胃と腎命がクローズアップされてくる。李杲の『脾胃論』は人の生命は元気によって維持され、その元気は胃気によって滋養されるので、脾胃を元気の本とし、「脾胃の気が損傷されると、元気もまた充実せず、そのためにさまざまな疾病が発生する」という観点を提出して、医学界の注目を集めた。また朱丹溪の『格致余論』では、心腎肝3

臟の病理を検討し、腎精は完全であることは珍しく虚損しやすいし、肝腎相火は妄動しやすいと述べ、「陽は常に余裕があるが、陰は常に不足している」という病機理論を提出した。

これに対し明代の薛立斎の『内科摘要』は、東垣と同じように脾胃を重視する一方、腎と命門の病理については、朱丹溪の「陽は常に余裕があるが、陰は常に不足している」という説にとらわれてはならないと警告している。また趙献可は『医貫』のなかで、薛立斎の学説を多く取り上げているが、とくに腎水命門を重視し、その病機についての研究を大いに発展させた。

明清以降は、臟腑病機に対する議論が非常に深化された。例えば綺石の『理虚元鑑』理虚二統篇では「陰虚証は肺によって決まり、陽虚証は脾によって決まる」として、肺脾虚弱の病機を明らかにしている。また王泰林の『夜話録』は、気・風・火を用いて肝臟の病機を明らかにしているが、独創的で興味深い理論である。このように、臟腑病機理論は歴代の医師たちによって補足されながら発展し、しだいに完成し体系を整えていき、中医学の病機体系の中核部分を構成するまでになったのである。

次に臟腑病機の内容について見てみよう。人体の臟腑を中心とする5大システムは、生理上互いに独立しているが、また連絡をとりあって全体の協調バランスを維持している。したがって病理状態になったときには互いに影響しあい、臟病が腑に伝わったり、腑病が臟に伝わったり、また臟病が別の臟に伝わったり、腑病が別の腑に伝わったりと、さまざまな伝変・転帰をたどる。ただし臟腑病機がどのように複雑であろうとも、臟腑病機の要点、つまり病因・病位・病性・病勢などを把握して分析すれば、その発生・発展の法則性を理解することができる。

臟腑病機の要点のうち、病因については先にも述べた。一方の病性とは、疾病の性質のことであり、臟腑病機を左右する要素の1つである。ではその疾病の性質とは、どのように決定されるのだろうか？ それは疾病が発生、発展するときの邪正闘争において、邪正のうちどちらが優位に立つかによって決まってくる。つまり疾病を構成する各段階というのは、どれをとってみても邪正闘争の結果として表れたものであり、その病理状態はそれぞれ虚実寒熱という病理性質によって表すことができるのである。

そのうち虚実とは、臟腑気機の盛衰や満ち欠け、正気と邪気の増減や強弱

が反映されたものである。つまり正気と臟腑の氣機が不足すれば虚であり、邪氣が強くと（水、食、痰、血の蓄積停滞も含まれる）なれば実である。『素問』通評虚实論篇がいうように「邪氣盛んなればすなわち実し、精氣奪われればすなわち虚す」である。

かたや寒熱とは、生体の陰陽と臟腑氣機のかたよりが表れたものである。つまり陰氣のほうが強くなれば、臟腑氣機は衰退して寒の病理が現れ、陽氣のほうが強くなれば、臟腑氣機は亢進して熱の病理が現れる。寒熱は病性の一面を表すとともに、病性の一部を決定する力をも持っている。

したがって虚実と寒熱は、疾病の発展過程で現れる病變の性質を表すことができ、虚実と寒熱を組み合わせれば、今邪正の優劣と陰陽の盛衰がどのような状況にあるかを表すことができる。

次に、いわゆる病位とは、臟腑病機がどの位置にあるかを表す言葉であり、臟象学説のなかの臟腑の位置を体系化した理論をもとに考案されたものである。そして臟象学説における臟腑の位置とは、機構のなかでの位置と機能のなかでの位置という概念を有機的に結合したうえで定められたものであるが、中心となるのは機能であり、機構は副次的なものとなる。これが臟腑病機の位置の特徴である。

また病勢とは、疾病の発展変化の趨勢を指し、そのなかには「伝変」と「転帰」という概念が含まれる。疾病は絶えず運動変化のまっただなかにあるので、病機というのは疾病のなかのある一段階の病理を示すにすぎず、病状が変化するにつれ、病機もまたともに変化する。したがって1つの疾病の病理変化の過程とは、無数にある病變段階の病機が集まって形成されたものであり、個々の病機を判断するときには、現段階の病勢を見るだけでなく、その病變の転帰をも考慮する必要がある。疾病が伝変・転帰する趨勢を全体を通して理解しなければ、個々の病機を深く認識することはできないのである。したがって、病勢を把握することは臟腑病機を研究するためには不可欠の要素である。

ただし臟腑病機を検討するときには、以下の点に注意しなければならない。

### [1] 五臟システムの総体性

人体の六腑と五体・五官は、五臟と緊密に連絡をとっているため、どれか1つの臟に病變が起きても、その臟に関わる生理機能やその臟が所属する部

分にさまざまな病象を引き起こす。例えば、肺は氣の宣降機能をコントロールすることによって津液を全身に行き渡らせ、水道の流れを調節し、外部では皮毛と連絡して衛外の守りを固めるが、構造的には喉と繋がって鼻に開竅している。したがって肺臟に疾患が発生すれば、肺臟・肺系・肺衛・肺竅などに氣と津液の異常が現れる。また心は神を蔵し、血脈の循環をコントロールし、脈絡と小腸に連絡し、舌に開竅している。そのため、心臟に疾病があれば、神・心・血・脈・舌など5ヶ所に病理変化が現れる。そうした事例からいえることは、その臟に関連する機構や機能を広範囲に渡って分析しなければ、病變の本質はわからないということである。

### [2] 五臟六腑の間の協調関係

五臟どうしは繋がっているため、各臟に所属するシステム内での協力も必要だが、五臟どうしのチームワークも必要である。五臟が相互に協調しあい、制約しあってこそはじめて、氣機の昇降出入運動が完成されるのである。したがって五臟どうしを切り離すことはできないし、どの臟に病氣が発生した場合でも、五臟どうしの協調関係を考慮したうえで治療しなければならない。

### [3] 臟腑機能と氣・血・津・精の間の弁証関係

氣・血・津・精は臟腑機能にエネルギーを供給し、五臟六腑が正常に機能するための活力源となる。しかしその氣・血・津・精の摂取・生化・輸送・排泄は、臟腑間の共同作業によって進められる。そこで氣機の障害や氣化異常、あるいは形質の損傷などがどの臟に現れても、氣・血・津・精に影響を及ぼし、それらを停滞させるだけでは止まらず、損失をも与える。したがって臟腑病機を分析するときには、氣・血・津・精の満ち欠けや、循環にも注意を配る必要がある。

### [4] 氣・血・津・精の依存・循環・転化

臟腑の病理変化は、必然的に氣・血・津・精の循環・依存性・転化に対しても影響を及ぼす。そのため、これを分析すれば、臟腑の病理変化をより深く理解することができる。

(陳 潮祖, 鄧 中甲)

## 第1節

### 肺と大腸の病機

肺臓の生理システムは、肺臓・肺系・肺経および皮毛・大腸の5つの部分から構成されている。肺臓は横隔膜の上であり、心臓とともに胸膈にある。そしてその位置は臓のなかでは最も高いところにあり、五臓六腑の傘の役目を果たしている。そこから肺臓は、「華蓋」と呼ばれている。張景岳の『類経図翼』は「肺葉は白く透き通っており、華蓋という名のとおりに諸臓を覆っている。その形状は蜂の巣のように穴があき、下が塞がっているので、息を吸い込めば一杯になり、吐き出せば空虚になり、その一息一息で自然界と連絡している。また肺は清濁の運化を担当し、人体のふいごの役目をする」と述べている。肺臓は、その位置と構造により、呼吸とともに膨らんだりしぼんだりすることができるため、新陳代謝を促進するのに適しているのである。

次に、鼻は肺の外竅、喉は肺の門戸であり、気管は肺と繋がっているため、それらは呼吸によって出入する大気の通り道となる。この通り道は、肺系と総称される。

皮毛は体表を構成する組織のなかで最も外層に位置し、外邪から人体を防御するための障壁となっている。また皮毛に点在する汗孔は玄府ともいい、汗を排泄し気を発散して呼吸と津液代謝を調節する作用がある。『素問』生氣通天論篇では、この汗孔を「氣門」あるいは「鬼門」ともいっている。また『素問』陰陽応象大論篇は「肺は皮毛を主る」とも述べているが、それは皮毛が肺臓から輸送される衛気や津液によって暖められる作用のことを指している。したがって、皮毛・汗孔は肺と密接に繋がっている。そしてその生理機能は「肺衛」としての特徴を持っている。

最後に、手太陰肺経は胸中に始まり、肺に属し、大腸と連絡し、大腸と表裏関係にある。このように肺経は肺臓が管轄するシステムの一部を構成する。

次に肺の機能について考えてみよう。肺は呼吸をコントロールし、その呼吸によって体内の気と自然界の気とを交換している。つまり『素問』陰陽応象大論篇のいう「天気は肺に通ず」という道理である。ただし呼吸活動は肺の働きだけでは完成せず、心や腎などの機能の助けも借りなければならない。ところで肺が気を主るとするのは、宗気的作用のことである。宗気とは、肺

が吸いこんだ自然界の気と、水穀の精気が一緒になってできたものである。そして百脈は肺に集まるので、宗気は喉を溯上して呼吸をコントロールしたあと、心脈に入って全身を巡る。したがって、肺が呼吸をコントロールする機能と全身の気をコントロールする機能とは互いに連絡しあっており、かつ肺が気をコントロールする機能は、肺が呼吸をコントロールする機能に支配されている。というのは肺臓が清気を吸いこんで濁気を吐き出すことによって宗気にエネルギー源を供給するからであり、この生成された宗気は、また肺が呼吸をコントロールするための動力源ともなる。この両方の機能が助け合いながら生体を維持するというのが、本来の肺気の生理機能である。

この他、肺には治節を主り、心の血液循環を助ける機能がある。また肺気は肅降し、水道を通調し、気と津液を宣発、散布し、皮膚を暖めて潤いを与える。鼻に開竅し、嗅覚を管轄するなどの機能も、全て肺が気を主るという機能が、肺臓の生理がさまざまな場面で具体化したものである。そのなかでも、肺が気を主るという機能は主に宣発と肅降という形で現れる。したがって、肺に最もよく見られる病理は宣発と肅降の異常である。

宣発とは宣布発散の意味であり、『靈枢』決気篇がいう「上焦は開発し、五穀の味を宣べ、膚を燠じ、身を充たし、毛を沢すこと、霧露の漑するがごとく、これを気という」ということである。つまり肺の宣発機能には、肺気が衛気と津液を全身に散布し、皮膚を暖め、全身に栄養を行き渡らせ、皮毛を潤す、といった各機能が含まれる。また皮膚上にある汗孔、つまり氣門も、肺が気と津液を散布する働きを助ける。したがって肺の宣発機能が異常をきたせば、肺衛に病変が現れる。これについて『素問』咳論篇は「皮毛とは、肺の合なり。皮毛まず邪気を受くれば、邪気はその合に従うなり」と述べ、外邪の侵入は皮毛から入って肺を犯すことが多いという点を指摘している。これは、肺に表証が現れる原因ともなっている。

肅降とは、清肅下降の意味であり、肺気の肅降機能は、気機の昇降と水や津液の輸送に影響を与える。ところで人体の気とは、絶えず運動しながら昇降上下するというのが、本来の形である。また五臓の気機の昇降についていえば、肝腎はともに下焦にあるが、下にあるものは上昇しようとするため、肝には条達・昇発する性質があるのである。また腎には元陰元陽があるが、腎陰が上昇して心陽を助ける作用や、水液が腎陽の働きを借りて気化・蒸発